

献血者集団における HIV 検査状況

分担研究者 矢内純吉(大阪府赤十字血液センター)

研究協力者 神前昌敏(大阪府赤十字血液センター)

[研究要旨]

2001年12月までの大阪府赤十字血液センターにおける献血集団について、HIV陽性者は年々増加し、最近では10万人当たり2.4人となっている。1996年4月から2001年12月までに計34名のHIV抗体陽性者を認めたが、男性が33名(97.1%)で圧倒的に多く、また初回献血者が24名(70.6%)、20歳代が19人(55.9%)であった。HIV抗体陽性者における重複感染率は52.9%で梅毒検査陽性者が44.0%を占めていた。一方、自己申告者数は1999年以降10,000人あたり2人前後となっており、男性に多く、男女とも20歳代に多かったがHIVも含め感染症検査陽性率には一般献血者群との間に明らかな差を認めなかった。HIV陽性献血者および自己申告者の献血場所別の偏りに明らかな特徴はみられなかったが、街頭献血でやや頻度が高かった。

[目的]

日本におけるHIV感染者、AIDS患者は増加傾向を示しており、献血者におけるHIV陽性率も年々増加している。NAT検査導入によるスクリーニング精度の向上が示される中で、HIV感染ハイリスク群からの献血をいかに防止するかが大きな課題となっている。この目的で、大阪府赤十字血液センターにおけるHIV陽性者、自己申告などの現状を献血回数、献血場所との関連も含めて解析した。

[対象]

調査対象は大阪府赤十字血液センターにおける2001年12月までの献血者について解析した。

[方法]

献血者のHIV抗体検査は日本赤十字血液センターの業務標準に従い、一次検査、二次検査はそれぞれPK7200あるいは用手法により富士レビオ社のPA法で、確認検査

は富士レビオ社のWB法で行った。1999年10月からはNATセンターで行われたHIV-RNA検査結果も追加した。電話による献血者からの自己申告は献血後3時間以内にフリーダイヤルで献血者コード番号と生年月日を連絡してきた者である。

[成績]

1.大阪府赤十字血液センターにおけるHIV陽性献血者

表1に見られるように1997年以降明らかな増加傾向を示し、昨年は10万人当たり2.3人を越し、全国平均を大きく上回っている。PA法陽性数とWB法陽性数の関係は表2のごとくである。PA法陰性群のなかに一昨年2名のNAT陽性者を認めたが、昨年は認めなかった。表3のようにHIV抗体陽性者(WB法)は男性に圧倒的に多く、梅毒検査陽性者が44.0%(15/34)であった。また、表8の全献血者群における初回献血者の割合が10.5%であることと比較してHIV抗体陽性

者では 70.6%と初回献血者に多かった。
 なお、外国人はいなかった。

2.大阪府赤十字血液センターにおける 自己申告の状況

表 4 のように自己申告数は年々減少して、
 1999 年には 1 万人当たり 1.9 人となり、2000
 年は 2.2 人とほぼ横ばいであった。また、自
 己申告者には HIV 陽性者を認めず、表 5 に
 見られるように他の感染症検査陽性率も一
 般の献血者群との間に明らかな差は見られ
 なかった。表 6 のごとく自己申告者は男性の
 方が多く、男女とも 20 代に多かった。献血
 回数との関係は表 9 と比較して、一般献血
 者群と大きな差はみられなかった。

3.献血場所別の解析

表 7 のように一般の献血者群と比較して
 HIV 抗体陽性献血者あるいは自己申告者に
 場所による大きな差は認められなかったが、
 何れも街頭献血でやや高率であった。
 HIV 抗体陽性の 10 名はすべて連絡が可能
 であった。

表 1 大阪府赤十字血液センターにおける
 年度別 HIV 陽性状況^{注1), 注2)} 大阪府民における
 年次別 HIV 陽性状況

年	献血者数	陽性数	陽性数/10万人	陽性数/10万人
1986	525,678	1	0.19	
1987	492,504	2	0.41	
1988	511,523	1	0.20	
1989	492,710	0	0.00	0.05
1990	507,853	3	0.59	0.08
1991	560,580	0	0.00	0.13
1992	528,918	1	0.19	0.31
1993	504,758	2	0.40	0.19
1994	494,111	3	0.61	0.17
1995	462,671	0	0.00	0.17
1996	453,815	3	0.66	0.16
1997	466,609	4	0.86	0.43
1998	479,667	6	1.25	0.58
1999	466,018	6	1.29	0.72
2000	436,219	9	2.06	0.58
2001	338,232	8	2.37	0.99
計	7,721,866	49	0.63	

注1) 2001年度については、2001年4月～12月で集計

注2) 1999年まではWB法、2000年以降はNAT検査結果も含む

表 2 大阪府赤十字血液センターにおける HIV 検査状況 (数/10 万人)

年度	献血者数	PA 法陽性数		WB 法陽性数	N A T 陽性数
		1 次検査保留	2 次検査陽性		
	計				
1997	466,609	1,143 (244.96)	124 (26.57)	4 (0.86)	-----
1998	479,667	860 (179.29)	127 (26.48)	6 (1.25)	-----
1999	466,018	1,479 (317.37)	233 (50.00)	6 (1.29)	-----
2000	436,219	2,095 (480.26)	222 (50.89)	7 (1.60)	2 (0.46)
2001	338,232	1,318 (389.67)	162 (47.90)	8 (2.37)	-----
計	2,186,745	6,895 (315.31)	868 (39.69)	31 (1.42)	2 (0.09)

注) 2001 年度については、2001 年 4 月～12 月で集計

表 3 HIV 抗体陽性者の実態(1996 年 4 月～2001 年 12 月)

HIV抗体陽性者数(WB法)	総数	34	100.0
性別	男性	33	97.1
	女性	1	2.9
年齢	10代	1	2.9
	20代	19	55.9
	30代	9	26.5
	40代	5	14.7
	初回	24	70.6
献血間隔	1回/1～2月	2	5.9
	1～2回/年	2	5.9
	1回/1～1.5年	4	11.8
	1回/1.5～3年	1	2.9
	1回/3年以上	1	2.9
	重複感染	なし	16
梅毒		13	38.2
HBV		3	8.8
梅毒+HBV		1	2.9
梅毒+HCV		1	2.9

表 4 大阪府赤十字血液センターにおける自己申告の状況 (1996～2000年度)

年度	献血者数	自己申告数	(%)	HIV抗体陽性数
1996	453,815	132	0.029	0
1997	466,609	139	0.030	0
1998	479,667	129	0.027	0
1999	466,018	87	0.019	0
2000	436,219	97	0.022	0
合計	2,302,328	584	0.025	0

表 5 自己申告者の感染症検査不合格率 (大阪府赤十字血液センター)

	自己申告なし (%)	自己申告あり (%)
献血者数	443,737(100)	81(100)
梅毒	1,979(0.45)	1(1.23)
HBs抗原	1,428(0.32)	1(1.23)
HBc抗体	10,752(2.42)	3(3.70)
HCV抗体	2,169(0.49)	1(1.23)
HTLV-1抗体	2,721(0.61)	0(0.00)
ALT \geq 61	10,573(2.38)	3(3.70)

(2001年1月～12月)

表 6 自己申告献血者の年代、性別、献血回数別分布 (2001年1月～12月)

年代	男性						女性							
	申告者数	献血回数別人数						申告者数	献血回数別人数					
		1	2	3	4	5	6↑		1	2	3	4	5	6↑
16～19							4	4						
20～29	29	21	2	3	1	2	13	6	3	2	1	1		
30～39	19	13	2	2		2	2	1	1				1	
40～49	7	3	2	1		1	1			1				
50～59	6	1			2	1	2							
60～	2	1		1										
合計	61	38	6	6	3	1	7	20	11	4	3	1	1	
%	75.3	46.9	7.4	7.4	3.7	1.2	8.6	24.7	13.6	4.9	3.7	1.2	1.2	

表 7 大阪府赤十字血液センターにおけるHIV抗体陽性献血者および自己申告者の献血場所別比率

献血場所	HIV抗体陽性献血者		自己申告		献血者	
	数	(%)	件数	(%)	数	(%)
献血ルーム	3	(30)	28	(34.5)	174,272	(39.3)
母体	1	(10)	2	(2.5)	23,069	(5.2)
採血車	6	(60)	51	(63.0)	246,477	(55.5)
職域献血	1	(10)	16	(19.8)	91,766	(20.7)
地域献血	1	(10)	13	(16.0)	73,009	(16.5)
街頭献血	4	(40)	19	(23.5)	64,759	(14.6)
その他(学校など)	0	(0)	3	(3.7)	16,943	(3.8)
合計	10	(100)	81	(100)	443,818	(100)
					(2001年1月～12月)	

表 8 大阪府赤十字血液センターの献血者における再献血状況

1999年1月～2001年12月(3年間)

献血回数	延べ人数 (%)	備考
初回献血者	142,053 (10.5)	
1回/3年	229,806 (17.0)	献血間隔>1.5年(初回献血者を除く)
≥2回/3年	980,234 (72.5)	献血間隔≤1.5年
計	1,352,093 (100.)	

表 9 大阪府赤十字血液センターの献血者における再献血状況 (実人数)

2001年1月～12月 (%)

	献血者実数	献血回数					
		1回	2回	3回	4回	5回	6回以上
男性	163,739 (55.1)	124,817 (42.0)	25,685 (8.6)	5,865 (2.0)	1,598 (0.5)	1,069 (0.4)	4,705 (1.6)
女性	133,370 (44.9)	103,455 (34.8)	19,758 (6.7)	4,683 (1.6)	1,956 (0.7)	977 (0.3)	2,541 (0.9)
計	297,109 (100.0)	228,272 (76.8)	45,443 (15.3)	10,548 (2.6)	3,554 (1.2)	2,046 (0.7)	7,246 (2.4)

[考察]

大阪府の献血者集団におけるHIV陽性率の増加傾向は、人口あたりのHIV感染率の増加を反映しているものと思われる。このような背景のもとで、昨年と同じく自己申告制度が、検査目的の献血防止に有効に働いているとの結果は得られなかった。また、HIV陽性献血者と自己申告者のいずれにおいても街頭献血者で比較的高率であったことは、この集団自身の

特徴ともまた、問診環境が不備であることを反映しているとも考えられよう。なお、職域献血や地域献血でも少ないながらHIV陽性者あるいは自己申告者を認めており、職場や地域の中で周囲との関係性を無視しがたい日本の社会構造にも問診の整備や広報、啓蒙の充実だけではハイリスクグループを排除するのに不十分である一因があろう。

若者の HIV/STD 関連知識・行動・予防介入に関する研究

研究代表者：	木原 雅子	広島大学医学部公衆衛生学
班 員：	木原 正博	京都大学大学院医学研究科国際保健学
	山崎 浩司	京都大学大学院人間・環境学研究科
	伊藤 智子	広島大学医学部公衆衛生学
	荒木 善光	京都大学大学院医学研究科国際保健学
	本間 隆之	京都大学大学院医学研究科国際保健学
	今井 敏幸	MASH 大阪
	吉嶺 敏子	京都大学大学院医学研究科国際保健学
	小松 隆一	国立社会保障人口問題研究所
	日高 庸晴	京都大学大学院医学研究科国際保健学
	内野 英幸	長野県大町保健所
	市川 誠一	神奈川県立衛生短期大学衛生技術科
	大屋 日登美	神奈川県立衛生短期大学衛生技術科
	前田 規子	長崎大学医学部保健学科看護学専攻
研究協力者：	片峰 茂	長崎大学大学院医学研究科感染分子病態学
	田原 靖昭	長崎大学教育学部
	久保田 健二	(元)長崎大学医療技術短期大学
	土居 浩	長崎県福祉保健部健康政策課
	下田 和寿人	長崎県福祉保健部健康政策課

研究の背景・目的とこれまでの研究の流れ

最近の厚生省エイズ動向調査および厚生省性感染症研究班の調査によると、10-20代の若者を中心に HIV や性器クラミジア感染症および淋菌感染症の感染者数が急速に増加を始め、また、10代における人口妊娠中絶率も近年増加傾向を示している。このような状況の中、これらの現象の背景となる若者の実態に関する社会疫学的調査は極めて数が限られていた。本グループでは、若者の HIV/STD 関連知識・行動・意識の実態を把握し、彼らに適した予防介入方法を開発する目的で研究を行っている。

これまでの経過としては、平成 9-11 年に一般集団を対象とした全国性行動調査と、若者の一部を形成する国立大学生を対象に

全国規模の性行動調査を実施し、若年者の性行動・予防意識の実態に関する基礎情報を得た。その結果、若年層ほど活発で無防備な性行動をとっていることが明らかとなった。さらに平成 12 年度には、特に高校生を中心とした 10 代の若者に焦点を当てた予防介入研究を開始し、首都圏の 10 代若者に関する質的調査と量的調査を実施し、首都圏の 10 代カップルの性行動の活発化とネットワーク化が明らかとなった。そこで、今年度は、地方の若者と彼らを取りまく環境の実態把握を目的とした研究と、その研究結果をベースにした地方の若者に対する予防介入研究を実施した。以下に本年度の研究の概要を記す。

平成 13 年度若者グループ研究概要

1. 若者の観察的研究

(1) 若者自身に関する研究

研究①-1 地方の高校生の日常生活・性意識・性行動調査 (地方 A 県)

研究①-2 地方の高校生の日常生活・性意識・性行動調査 (地方 B 県)

研究② 都会の若者に対するクラブイベント調査

研究③ 海外の日本人留学生の性的健康に関する研究 (米国)

(2) 若者をとりまく環境に関する研究

研究④ 親・子・教師の意識・知識の違いに関する研究 (地方 B 県)

研究⑤ 性教育実態調査 (地方 B 県)

2. 若者の予防介入研究

研究⑥ 高校生に対する予防介入研究 (地方 B 県)

研究⑦ FGI を用いた予防介入の評価検討 (地方 B 県)

3. 若者の調査方法検討のための基礎的研究

研究⑧ 性行動に関する質問紙調査の信頼性の検討

研究 ①-1 地方の高校生の日常生活・性意識・性行動に関する調査

—報告1:A 県調査結果—

グループ長：木原 雅子	広島大学医学部公衆衛生学
班 員：木原 正博	京都大学大学院医学研究科国際保健学
荒木 善光	京都大学大学院医学研究科国際保健学
本間 隆之	京都大学大学院医学研究科国際保健学
前田 規子	長崎大学医学部保健学科看護学専攻
研究協力者：田原 靖昭	長崎大学教育学部
片峰 茂	長崎大学大学院医学研究科感染分子病態学
久保田 健二	(元)長崎大学医療技術短期大学
土居 浩	長崎県福祉保健部健康政策課
下田 和寿人	長崎県福祉保健部健康政策課

研究の背景

1990年代以降、わが国の若者の間でエイズや性感染症が蔓延し始めており、10代の人工妊娠中絶率も急速に増加している。

地方 A 県も例外ではなく、人工妊娠中絶者のうち 15-19 歳の若年女性では 1995 年以降、その数が増加を始めている。また、10 代妊婦・非妊婦(産婦人科受診者)のクラミジア感染率も、全国平均を大きく上回るなど、A 県の若者の性をめぐる状況も憂慮すべき現状にある。

こうしたことから、地方 A 県の若者に対する効果的なエイズ/性感染症予防対策の確立と実施は緊要の課題であるが、そのための基礎として、地方 A 県の若者の性行動やライフスタイルの把握は不可欠である。

本調査(高校生エイズ予防のための基礎調査)は、こうした認識に基づいて実施されたものであり、高校生 2 年生を対象として、日常生活、エイズ・性感染症・避妊に関する知識のレベル、性意識、リスク行動の程度、コンドーム使用状況等の実態を把握することを目的とした。

本報告書は、単純分析を中心とした集計結果をまとめたものである。

研究方法

調査実施時期 2001 年 2-3 月

対象：地方 A 県全域のすべての高等学校を対象とした。(注：今後の予防介入時の motivation を向上させるために、ランダムサンプリングは行わず、悉皆調査とした)

調査方法：地方 A 県の公立・私立・国立の全校 86 校の養護教諭に対し、調査を依頼し、養護教諭の協力により調査を実施した。

★回収率を上げるための工夫

- ① 依頼状には、地方 A 県の統計資料および我々の実施した他の若者の調査結果など、具体例を示し、本調査の必要性を強調した。
- ② 県教育庁体育保健課(公立校)および県総務部学事振興課(私立校)の協力を得て、県教委の推薦文とともに、県教委から調査票を全校に配布した。
- ③ 不参加校には督促状を送付した。

調査方法：無記名自記式質問紙調査 学校における集合調査。調査は試験と同じ状況で実施した。

質問票と調査項目

本調査に先立ち、本県の高校生男女(性経験の有無により4グループ)を対象にインタビュー調査を実施し、その調査結果を基にアンケートの開発を行った。

性行動の質問については、高校生の性行動の実態を調査するために開発した質問票(MKBQ-highs)を使用した。質問票は自記式で11ページ、回答時間約15分、主質問33、付問4である。質問票の構成は、①生活環境、②交友関係(含性経験)、③エイズ、性感染症に関する知識、④性感染症やエイズのリスク認知、⑤コンドームに対する考え方、⑥性モラル、⑦性に関する情報源・性教育に対する要望等である。この質問票では、とび先を矢印や記号で指示するなど、分かりやすいレイアウトを工夫するなどの配慮を行った(資料1)。

倫理的な配慮

倫理的な配慮として、質問票の表紙には、匿名性を保つこと、データは統計処理されることを明記した。調査開始前には、調査が強制ではないこと、答えたくない点は回答しなくてよい事(白紙での提出も可)、記入しなかったことによって成績等に影響することはないなど、調査を拒否しても不利益を被らないことを説明することとした。また、調査終了後は、生徒本人により、添付のカラーシールで封をさせ、学校関係者は内容を見ないことを説明した。

調査参加高等学校

某県下86高等学校(公立高等学校65校、私立高等学校21校)へ調査を依頼し、31高等学校(36.0%)が調査に参加した。参加高等学校はほぼ全県にわたっており、地域によって偏りなく分布していた。

調査に参加した生徒総数は4942人であった。そのうち性別が未記入であった生徒7人を除く、4935人を有効回答数とした。男性45.8%、女性54.2%と女性のほうがやや多かった。国公立別では公立高等学校70.1%、私立高等学校29.9%であった。

表1.対象者の性別・国公立別内訳

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
公立	1775	78.5	1684	63.0	3459	70.1
私立	485	21.5	991	37.0	1476	29.9
合計	2260	100.0	2675	100.0	4935	100.0

性別未記入の生徒7人を除く

調査結果

1. 高校生の日常生活状況

(1) 遊び場

表2によく遊びに行くところを示した。全体ではカラオケ(47.2%)、コンビニ(35.3%)が上位を占めた。性別にみると男性では男友達の家(61.9%)、コンビニ(35.7%)、カラオケ(34.8%)、ゲームセンター(26.2%)の順で高い傾向を示したのに対し、女性ではカラオケ(57.7%)、女友達の家(46.0%)、コンビニ(34.9%)、ファーストフード店(34.8%)の順で高い傾向を示した。男性女性とも同性の友達の家によく遊びに行くだけでなく、カラオケ、コンビニによく行くことが示唆された。

表2. よく遊びに行くところ(複数回答)

	男性		女性		全体	
	人数	% (n=2260)	人数	% (n=2675)	人数	% (n=4935)
カラオケ	786	34.8	1543	57.7	2329	47.2
コンビニ	807	35.7	934	34.9	1741	35.3
男の友達の家	1400	61.9	158	5.9	1558	31.6
繁華街	463	20.5	858	32.1	1321	26.8
女の友達の家	77	3.4	1230	46.0	1307	26.5
ゲームセンター	591	26.2	684	25.6	1275	25.8
ファーストフード店	291	12.9	930	34.8	1221	24.7
彼氏や彼女の家	184	8.1	383	14.3	567	11.5
映画館	183	8.1	364	13.6	547	11.1
公園	269	11.9	276	10.3	545	11.0
その他	166	7.3	146	5.5	312	6.3
遊びに行かない	312	13.8	277	10.4	589	11.9
無回答	14	0.6	19	0.7	33	0.7

(2)カラオケに行く頻度と消費時間

カラオケに行く頻度は全体で、月 2-3 回(18.9%)が高い傾向を示した。性別にみると月に 1 回以上行く人の割合は女性 45.3%、男性 37.3%と女性のほうがカラオケに行く頻度が多い傾向にあった。またカラオケ消費時間は、2-3時間が男女とも最も多く70%以上を占めた。

表3.カラオケに行く頻度

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
週2回以上	28	1.2	23	0.9	51	1.0
週1回くらい	103	4.6	92	3.4	195	4.0
月2-3回	342	15.1	592	22.1	934	18.9
月1回くらい	371	16.4	506	18.9	877	17.8
2ヶ月に1回くらい	257	11.4	472	17.6	729	14.8
年3-4回くらい	253	11.2	382	14.3	635	12.9
年1-2回くらい	263	11.6	248	9.3	511	10.4
カラオケには行かない	603	26.7	340	12.7	943	19.1
無回答	40	1.8	20	0.7	60	1.2
合計	2260	100.0	2675	100.0	4935	100.0

表4.カラオケ所要時間

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
1時間	93	5.8	42	1.8	135	3.4
2時間	759	46.9	688	29.7	1447	36.8
3時間	515	31.8	844	36.5	1359	34.6
4時間	119	7.4	286	12.4	405	10.3
5時間	51	3.2	242	10.5	293	7.5
6時間以上	54	3.3	189	8.2	243	6.2
無回答	26	1.6	24	1.0	50	1.3
合計	1617	100.0	2315	100.0	3932	100.0

カラオケ頻度の項目のうち、「カラオケに行かない」「無回答」の人を除く

(3)通信手段

高校生の通信手段はメール機能つき携帯電話が最も多く、全体で 60%を超えていた。パソコンを持っている割合は男女ともに 21-22%であった。

表5.高校生の通信手段(複数回答)

	男性		女性		全体	
	人数	% (n=2260)	人数	% (n=2675)	人数	% (n=4935)
メール機能つき携帯電話	1268	56.1	1701	63.6	2969	60.2
メール機能なし携帯電話	13	0.6	14	0.5	27	0.5
PHS	64	2.8	216	8.1	280	5.7
ポケベル	5	0.2	14	0.5	19	0.4
パソコン	483	21.4	577	21.6	1060	21.5
どれも持っていない	645	28.5	524	19.6	1169	23.7
無回答	64	2.8	20	0.7	84	1.7

(4) 飲酒、喫煙経験率

飲酒経験率は全体では 57.0%、男性では 61.6%、女性では 53.2%であった。一方喫煙経験率は全体で 27.7%、男性 38.7%、女性 18.5%であった。

表6. 飲酒経験の割合

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
飲酒経験あり	1392	61.6	1423	53.2	2815	57.0
飲酒経験なし	790	35.0	1095	40.9	1885	38.2
不明	78	3.5	157	5.9	235	4.8
合計	2260	100.0	2675	100.0	4935	100.0

表7. 喫煙経験の割合

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
喫煙経験あり	874	38.7	495	18.5	1369	27.7
喫煙経験なし	1266	56.0	1928	72.1	3194	64.7
不明	120	5.3	252	9.4	372	7.5
合計	2260	100.0	2675	100.0	4935	100.0

(5) 交際状況

高校生の交際状況をみると、交際経験（現在及び以前）を持っている人は、男性 59.3%、女性 61.5%と男女ともほぼ 6 割であった。知り合った機会としては、全体で学校、友達（男友達、女友達）の紹介、メールの順に高い傾向を示した。

表8. 彼氏彼女がいるか

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
付き合ったことがない	891	39.4	976	36.5	1867	37.8
以前付き合っていたが今はいない	864	38.2	976	36.5	1840	37.3
現在付き合っている人がいる	477	21.1	669	25.0	1146	23.2
無回答	28	1.2	54	2.0	82	1.7
合計	2260	100.0	2675	100.0	4935	100.0

表9. 彼氏、彼女とはどのようにして知り合うか(複数回答)

	男性		女性		全体	
	人数	% (n=2260)	人数	% (n=2675)	人数	% (n=4935)
学校	710	31.4	851	31.8	1561	31.6
女の友達の紹介	352	15.6	665	24.9	1017	20.6
男の友達の紹介	418	18.5	347	13.0	765	15.5
メール	303	13.4	431	16.1	734	14.9
合コン	126	5.6	186	7.0	312	6.3
ナンパ	69	3.1	115	4.3	184	3.7
バイト先、職場	39	1.7	60	2.2	99	2.0
兄弟姉妹やいとこなどの親族の紹介	17	0.8	40	1.5	57	1.2
塾、予備校	20	0.9	31	1.2	51	1.0
その他	56	2.5	76	2.8	132	2.7
いない	1035	45.8	1083	40.5	2118	42.9
無回答	119	5.3	144	5.4	263	5.3

2. HIV/性感染症(STD)関連知識の普及状況

(1)HIV/性感染症(STD)の知識に関する項目の正解率

HIV や STD が増加している事実についての認識は、全体で 74.1%が正しい認識を示していた。また、食器、風呂、トイレを介した感染の有無についても正解率は 80%以上であった。また、「14.コンドームを使うことは HIV/STD の予防に有効」との認識は 90%以上認められた。しかし、「7.口から性器への感染」「8.性器から口への感染」「6.性感染症にかかっていると HIV に感染しやすい」といった HIV/STD の感染経路に関する項目の正解率は 2、3 割程度、また、「性感染症にかかると必ず症状が出る(正解は×)」、「10.性感染症を治療しないと不妊症になることがある(正解は○)」という項目の正解率もそれぞれ 34.7%、38.6%と低く、性感染症についての正確な知識を提供する必要があると示唆される。HIV 検査に関する項目(12,13)についても正解率は 3-4 割台にとどまっており、検査についての情報提供も必要である。

表10.HIV/性感染症に関する知識の正解率(括弧内が正解)

	男性(n=2260)		女性(n=2675)		全体(n=4935)	
	人数	%	人数	%	人数	%
1 最近,日本の若者の間でHIV感染者が増えている(○)	1643	72.7	2013	75.3	3660	74.1
2 最近,日本の若者の間で性病患者が増えている(○)	1727	76.4	1283	81.6	3912	79.2
3 HIV感染者が使用した食器を使うとHIVに感染する可能性がある(×)	1852	81.9	2363	88.3	4220	85.4
4 HIV感染者が入った風呂に入ると, HIVに感染する可能性がある(×)	1849	81.8	2171	81.2	4024	81.4
5 HIV感染者が使用したトイレを使うとHIVに感染する可能性がある(×)	1866	82.6	2200	82.2	4071	82.4
6 性感染症にかかっているとHIVに感染しやすい(○)	518	22.9	654	24.4	1173	23.7
7 口を使ったセックスで口から性器に性感染症が感染する可能性がある(○)	520	23.0	489	18.3	1101	20.5
8 口を使ったセックスで性器から口に性感染症が感染する可能性がある(○)	743	32.9	901	33.7	1648	33.3
9 性感染症にかかると必ず症状が出る(×)	768	34.0	956	35.3	1714	34.7
10 性感染症を治療しないと,不妊症になることがある(○)	816	36.1	1088	40.7	1906	38.6
11 新薬でHIV感染してから発病までの時期を遅くすることができる(○)	893	39.5	1238	46.3	2134	43.2
12 普通のHIV感染の検査では感染してから数日後に結果がわかる(×)	640	28.3	1033	38.6	1675	33.9
13 保健所では名前を言わずに無料でHIVの検査ができる(○)	964	42.7	1225	45.8	2191	44.3
14 コンドームを使うことは性病やAIDSの予防に有効である(○)	2075	91.8	2419	90.4	4499	91.0

(2)聞いたことのある性感染症

名前を聞いたことがある性感染症については AIDS が 98.0%と高いが、その他の項目はクラミジアで 58.2%、それ以外では 50%以下であり、AIDS 以外の性感染症は名前すらあまり認識されていないことがわかる。

表11.病名を聞いたことがある性感染症(複数回答)

	男性(n=2260)		女性(n=2675)		全体(n=4935)	
	人数	%	人数	%	人数	%
AIDS	2147	95.0	2590	96.8	4742	96.0
クラミジア	1187	52.5	1627	60.8	2816	57.0
梅毒	991	43.8	1083	40.5	2077	42.0
淋病	971	43.0	1110	41.5	2082	42.1
毛じらみ	955	42.3	1220	45.6	2178	44.1
ヘルペス	778	34.4	1201	44.9	1983	40.1
コンジローム	553	24.5	357	13.3	911	18.4

(3)ピルについて

「ピルという薬を知っているか」との問いに対して 56.4%が「どういう薬か知っている」、33.2%が「名前は聞いたことがある」と答えているが（表 12）、ピルの認知度別にピルの知識に関する正解率をみると（表 13）「どういう薬か知っている」と答えた人においても、「ピルはエイズの予防になるか（正解は×）」では 60.4%、「ピルは性病の予防になるか（正解は×）」では 54.8%であり、高い正解率とはいえない。ピルが妊娠を予防することが、エイズや性感染症まで予防するという誤解につながっている可能性があり、正確な知識の提供が必要である。

表12.ピルの認知度

	男性(n=2260)		女性(n=2675)		全体(n=4935)	
	人数	%	人数	%	人数	%
どういう薬か知っている	1267	56.1	1516	56.7	2786	56.4
名前は聞いたことがある	719	31.8	919	34.4	1639	33.2
知らない	185	8.2	158	5.9	344	7.0
無回答	89	3.9	82	3.1	173	3.5

表13.ピルの認知度別の正解率(複数回答)

(括弧内が正解)	ピルの認知度		
	どういうクスリか 知っている人(%)	名前は聞いたこ とがある人(%)	知らない人(%)
	(n=2786)	(n=1639)	(n=344)
ピルは避妊薬である(○)	94.5	67.4	21.7
ピルはエイズの予防になるか(×)	60.4	28.9	8.2
ピルは性病の予防になるか(×)	54.8	23.5	6.2

(4)コンドーム使用及び性感染症に対する態度

コンドーム使用については、「特定の人とのセックスならコンドームを使わなくてもよい」という考えに否定的な人は、男性 61.2% (表 14)、女性 83.3% (表 15)、「相手が誰であろうとコンドームを使うべき」と考えている人は、男性 59.8%、女性 81.3%であり、また、「性病は薬で治るので心配要らない」という考えに否定的な人は、男性 76.4%、女性 82.3%、「決まった相手なら性病にはかからない」という考えに否定的な人は、男性 48.3%、女性 61.5%と、コンドーム使用への積極的態度や性感染症への関心は女性の方で高い傾向を示した。また、「性病よりも妊娠のほうが心配である」との間に対しては、男女とも「わからない」と態度を決めかねている者が多いが、男性では「そう思う」がやや多く、女性では「そう思わない」が明らかに多く、対照的な結果が得られた。性感染症感染の事実を相手に言うかどうかについては、男女ほぼ同一の結果で、相手に言うと言った者は、4 割程度であった。

表14.コンドーム使用及び性感染症に対する態度(男性、複数回答)

	男性(n=2260)		
	そう思わ		
	そう思う(%)	ない(%)	わからない(%)
特定の人とのセックスではコンドームは使わなくていいと思う	22.7	61.2	15.2
相手が誰であろうと、コンドームは使うべきである	59.8	24.0	15.3
性病は薬で治るのであまり心配することはないと思う	3.4	76.4	19.2
性病よりも妊娠のほうが心配である	33.8	30.4	35.0
もし性病にかかっても相手には言わないと思う	24.9	36.0	38.1
決まった一人の相手とのセックスなら性病にはかからないと思う	20.4	48.3	30.5

表15.コンドーム使用及び性感染症に関する態度(女性、複数回答)

	女性(n=2675)		
	そう思わ		
	そう思う(%)	ない(%)	わからない(%)
特定の人とのセックスではコンドームは使わなくていいと思う	8.3	83.3	8.0
相手が誰であろうと、コンドームは使うべきである	81.3	10.2	8.0
性病は薬で治るのであまり心配することはないと思う	2.6	82.3	14.6
性病よりも妊娠のほうが心配である	27.6	40.2	31.6
もし性病にかかっても相手には言わないと思う	19.8	40.4	39.3
決まった一人の相手とのセックスなら性病にはかからないと思う	11.5	61.5	26.4

(5)妊娠・性病が話題になるか

妊娠、性病が友達との間で話題にのぼるかという質問に対しては、妊娠に関しては男性で 36.5%、女性で 55%。性病に関しては男性で 15.6%、女子で 17.4%と、かなり低い。男女とも性病より妊娠に関心が高いことが伺われる。

表16.妊娠、性病が話題になる頻度

	男性(n=2260)		女性(n=2675)	
	人数	%	人数	%
妊娠が話題になることがある	818	36.2	1447	54.1
性病が話題になることがある	349	15.4	460	17.2

3. 性行動

(1) 性交経験率

高校生のセックス経験率は全体で26.1%、男性で24.8%、女性が27.1%であった。また、高校生に同じクラスの何%くらいの人がセックスを経験していると思うかについて質問したところ、性交経験者では男女とも約4割と見積もっていたのに対し、性交未経験者では約2割と見積もっており、認知に違いがあることが示唆されたが、平均値は、男女とも実際の性交経験率にかなり近い値を示した。

表17. 性交経験 (性別)

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
性交経験あり	560	24.8	726	27.1	1286	26.1
性交経験なし	1641	72.6	1865	69.7	3506	71.0
無回答	59	2.6	84	3.1	143	2.9
合計	2260	100.0	2675	100.0	4935	100.0

表18. 同級生 (同じクラス) の性交経験率についての見積もり (性交経験別)

	平均値	標準偏差	人数
	男性		
性交経験者	37.8	25.4	558
未性交経験者	21.1	19.8	1626
合計	25.4	22.6	2184
女性			
性交経験者	38.7	24.5	725
未性交経験者	23.6	21.4	1864
合計	27.8	23.3	2589
合計			
性交経験者	38.3	24.9	1283
未性交経験者	22.5	20.7	3490
合計	26.7	23.0	4773

(2) 初交年齢

セックスを経験している男女を対象に初交年齢をみると、全体では16歳(42.8%)、15歳(25.0%)、17歳(19.4%)の順で高い傾向を示し、男女とも同じような傾向であった。16歳が最も多いことについては、本調査が高校2年生の調査であることに留意する必要がある。

表19. 初交年齢

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
12歳以下	8	1.4	5	0.7	13	1.0
13歳	14	2.5	16	2.2	30	2.3
14歳	45	8.0	48	6.6	93	7.2
15歳	135	24.1	187	25.8	322	25.0
16歳	245	43.8	306	42.1	551	42.8
17歳	102	18.2	148	20.4	250	19.4
18歳以上	2	0.4	1	0.1	3	0.2
無回答	9	1.6	15	2.1	24	1.9
合計	560	100.0	726	100.0	1286	100.0

(3)これまでのセックスの相手数

これまでのセックスパートナー数を性別で見ると、男女とも1人の割合は50%以下であり、4人以上の生徒の割合は、全体で19.8%、男性で21.1%、女性で18.8%と、性交経験者の2割にのぼった。

表20.これまでのセックスの相手の人数(性交経験者のみ)

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
1人	257	45.9	327	45.0	584	45.4
2人	101	18.0	148	20.4	249	19.4
3人	74	13.2	95	13.1	169	13.1
4人以上	114	20.4	132	18.2	246	19.1
無回答	14	2.5	24	3.3	38	3.0
合計	560	100.0	726	100.0	1286	100.0

4. 高校生のセックスに対する認容度

高校生がセックスすることに対する意識の違いを性交経験の有無別に分析した。「かまわない」と答えたものは、男性においては、性交経験者群で83.0%、性交未経験者群では60.0%であり、女性においては、それぞれ72.1%、43.1%であった。性交経験の有無により、高校生が性交することに対する意識の違いがみられたが、セックス未経験者でも高校生のセックスを認める者がかなりの割合にのぼることが注目される。

表21.高校生のセックスについての許容度

	性交経験者		性交未経験者		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
男性						
かまわない	463	83.0	979	60.0	1442	65.8
どちらかといえばかまわない	67	12.0	343	21.0	410	18.7
どちらかといえばよくない	8	1.4	96	5.9	104	4.7
よくない	2	0.4	59	3.6	61	2.8
わからない	18	3.2	156	9.6	174	7.9
合計	558	100.0	1633	100.0	2191	100.0
女性						
かまわない	519	72.1	798	43.1	1317	51.2
どちらかといえばかまわない	149	20.7	558	30.1	707	27.5
どちらかといえばよくない	24	3.3	212	11.4	236	9.2
よくない	3	0.4	82	4.4	85	3.3
わからない	25	3.5	202	10.9	227	8.8
合計	720	100.0	1852	100.0	2572	100.0

無回答者は分析から除外

5. コンドームに関する質問

(1) コンドームの使用状況

普段のセックス時のコンドーム常用率(毎回使用する人の割合)は全体で 20.4%、男性では 22.3%、女性では 18.9%であった(表 22)。

セックスパートナーの数とコンドーム使用状況の関係をみると、男女ともに性交人数が多いほど、コンドーム常用率が低い傾向にあることが示唆された。(表 24)

表22. 普段のコンドーム使用状況(性経験者のみ)

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
1度も使用しなかった	82	14.6	89	12.3	171	13.3
時々使用する	345	61.6	488	67.2	833	64.8
毎回使用する	125	22.3	137	18.9	262	20.4
無回答	8	1.4	12	1.7	20	1.6
合計	560	100.0	726	100.0	1286	100.0

ただし、項目「時々使用する」は「使用しないほうが多かった」、「半々だった」、「使用するほうが多かった」の3項目をまとめて集計したものである。

表23. 性交人数とコンドーム使用状況

	性交人数							
	1人		2人		3人		4人以上	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
男性								
一度も使用しなかった	42	16.5	12	11.8	7	9.3	17	14.8
時々使用する	136	53.3	58	56.9	56	74.7	94	81.7
毎回使用する	77	30.2	32	31.4	12	16.0	4	3.5
全体	255	100.0	102	100.0	75	100.0	115	100.0
女性								
一度も使用しなかった	51	15.5	16	10.8	5	5.3	15	11.4
時々使用する	174	53.0	108	73.0	84	88.4	116	87.9
毎回使用する	103	31.4	24	16.2	6	6.3	1	0.8
全体	328	100.0	148	100.0	95	100.0	132	100.0

無回答者は分析から除外

次にコンドームの正しい使用方法を習ったことがあるかどうかにより、コンドーム使用状況に違いがあるかについて示した。表 24 に示すとおり男女ともに教育を受けた経験の有無による違いがみられず、これまでの性教育の範囲で行われていたコンドーム教育では行動を変えるまでの効果があがっていない様子が伺われる。

表24. コンドーム使用方法の教育の有無とコンドーム使用状況

	コンドーム使用方法の教育を受けた経験の有無					
	経験あり		経験なし		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
男性						
一度も使用しなかった	37	14.4	45	15.4	82	14.9
時々使用する	161	62.6	182	62.1	343	62.4
毎回使用する	59	23.0	66	22.5	125	22.7
全体	257	100.0	293	100.0	550	100.0
女性						
一度も使用しなかった	34	11.2	54	13.4	88	12.4
時々使用する	213	70.3	269	66.6	482	68.2
毎回使用する	56	18.5	81	20.0	137	19.4
全体	303	100.0	404	100.0	707	100.0

無回答者は分析から除外

さらに、コンドーム使用への態度と実際の使用状況の関係を検討した。「特定の人とのセックスでもコンドームを使用すべき」と考えている人(表 25 の「そう思わない」)、「相手が誰であろうとコンドームを使うべき」と考えている人(表 26 の「そう思う」)では、それ以外の人に比べて、毎回コンドームを使用する割合が高い傾向にあり、意識の高い人ほど、実際にコンドーム使用頻度が高い傾向にあることがわかった。しかし、それでも毎回使用者の割合は 2-3 割程度であり、態度と実際の行動の間に大きなずれがあることが示された。

表25.「特定の人とのセックスではコンドームを使わなくていいと思う」という問いに対する回答とコンドームの使用状況

	「特定の人とのセックスではコンドームを使わなくていいと思う」							
	「そう思う」		「そう思わない」		「わからない」		「全体」	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
男性								
一度も使用しなかった	33	21.6	38	11.1	9	17.6	80	14.6
時々使用する	102	66.7	206	60.1	34	66.7	342	62.5
毎回使用する	18	11.8	99	28.9	8	15.7	125	22.9
全体	153	100.0	343	100.0	51	100.0	547	100.0
女性								
一度も使用しなかった	22	20.8	60	10.7	6	13.3	88	12.4
時々使用する	75	70.8	375	66.8	37	82.2	487	68.4
毎回使用する	9	8.5	126	22.5	2	4.4	137	19.2
全体	106	100.0	561	100.0	45	100.0	712	100.0

無回答者は分析から除外

表26.「相手が誰であろうとコンドームは使うべきである」という問いに対する回答とコンドームの使用状況

	「相手が誰であろうとコンドームは使うべきである」							
	「そう思う」		「そう思わない」		「わからない」		「全体」	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
男性								
一度も使用しなかった	30	9.1	37	23.4	14	23.3	81	14.8
時々使用する	207	62.9	102	64.6	33	55.0	342	62.5
毎回使用する	92	28.0	19	12.0	13	21.7	124	22.7
全体	329	100.0	158	100.0	60	100.0	547	100.0
女性								
一度も使用しなかった	62	11.0	20	21.5	6	11.3	88	12.4
時々使用する	377	66.6	67	72.0	43	81.1	487	68.4
毎回使用する	127	22.4	6	6.5	4	7.5	137	19.2
全体	566	100.0	93	100.0	53	100.0	712	100.0

無回答者は分析から除外

6. 性知識、性感染症・HIV の情報源及び教育

(1) 生徒からの要望

① エイズ、性病予防のパンフレットの置き場

生徒が希望するエイズ、性病予防のパンフレットの置き場を表 28 に示した。「コンドームの箱の中やパッケージに入れる」が全体で 50%を超えて最も高く、以下「薬局、薬店、ドラッグストア」「学校の保健室」があげられた。生徒の身近な存在としてある学校の保健室が上位にあがっていることに注目したい。

表27. エイズ、性病予防パンフレットの置き場(複数回答)

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
	(n=2260)		(n=2675)		(n=4935)	
コンドームの箱の中やパッケージに入れる	1155	51.1	1230	46.0	2385	48.3
薬局、薬店、ドラッグストア	829	36.7	1194	44.6	2023	41.0
学校の保健室	740	32.7	1195	44.7	1935	39.2
駅、公園の公衆トイレ	585	25.9	459	17.2	1044	21.2
近所の内科病院	421	18.6	586	21.9	1007	20.4
コンビニ	538	23.8	364	13.6	902	18.3
カラオケボックス	377	16.7	438	16.4	815	16.5
公民館	182	8.1	119	4.4	301	6.1
イベント会場	153	6.8	113	4.2	266	5.4
ゲームセンター	183	8.1	76	2.8	259	5.2
通院中の歯医者	118	5.2	98	3.7	216	4.4
ファーストフード店	98	4.3	74	2.8	172	3.5
ファミリーレストラン	75	3.3	33	1.2	108	2.2
アルバイト先	54	2.4	22	0.8	76	1.5
無回答	142	6.3	163	6.1	305	6.2

② 性教育や性病予防の教え方について

全体で、「危ないことは危ないと教えて欲しい」が 91.2%と最も高く、「教える場合は堂々と教えて欲しい」「ふざけ半分の言い方はして欲しくない」「教える人自身の話や自分の友達の話など身近に感じられると聞きやすい」が 70%以上の学生から要望として上げられた。学生たちが性の問題を正面からまじめに取り上げてほしいと思っていることが示唆される。

表28. 性教育やエイズや性病予防の教え方について(複数回答)

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
	(n=2260)		(n=2675)		(n=4935)	
1. 危ないことは危ないと教えて欲しい	1998	88.4	2501	93.5	4499	91.2
2. 教える場合は、堂々と教えて欲しい	1825	80.8	2225	83.2	4050	82.1
3. ふざけ半分の言い方はして欲しくない	1540	68.1	2161	80.8	3701	75.0
4. 教える人自身の話や自分の友達の話など、身近に感じられると聞きやすい	1470	65.0	2008	75.1	3478	70.5
5. 性病やエイズが心配になったときに、相談できる相手や病院の連絡先などすぐに役立つことを教えて欲しい	1460	64.6	2017	75.4	3477	70.5
6. 専門家の話は、信頼できる	1445	63.9	1864	69.7	3309	67.1
7. 何度も継続して性教育をするべきと思う	1011	44.7	1282	47.9	2293	46.5
8. 熱心な人の話を聞きたい	1037	45.9	1212	45.3	2249	45.6
9. コンドームの正しいつけ方を教えて欲しい	1010	44.7	1151	43.0	2161	43.8
10. 中高生はセックスしていないというような話し方はしらける	1053	46.6	1101	41.2	2154	43.6
11. おもしろおかしく本当の事を教えて欲しい	830	36.7	727	27.2	1557	31.6
12. 男子と女子は別々に教える方がよい	564	25.0	906	33.9	1470	29.8
13. 小学校低学年から性教育をするべきと思う	701	31.0	757	28.3	1458	29.5
14. 性のことだけを取り上げて話をすると聞きたくない	468	20.7	642	24.0	1110	22.5

(2)エイズ、性病予防の情報について

これまでの情報源と、今後希望する情報源を、それぞれ表 29、表 30 に示した。これまでの情報源としては、保健体育の教師が約 85%で最も高く、その他の項目に関しては約 50%あるいはそれ以下であった。これに対し、今後希望する情報源については、医師、看護婦、研究者などの専門家への希望も約 3 割程度存在することが示された。

表29.これまでエイズ、性病予防についての情報をどこで(誰から)得たか(複数回答)

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
	(n=2260)		(n=2675)		(n=4935)	
中学や高校の保健体育の教師	1881	83.2	2248	84.0	4129	83.7
テレビのニュース	1212	53.6	1285	48.0	2497	50.6
テレビのドラマ	831	36.8	1315	49.2	2146	43.5
テレビの特集番組	834	36.9	1043	39.0	1877	38.0
雑誌、週刊誌	669	29.6	887	33.2	1556	31.5
中学や高校の家庭科の教師	649	28.7	765	28.6	1414	28.7
中学や高校の養護教諭	324	14.3	767	28.7	1091	22.1
女の友達	165	7.3	740	27.7	905	18.3
男の友達	709	31.4	170	6.4	879	17.8
漫画、コミック	329	14.6	479	17.9	808	16.4
新聞	423	18.7	298	11.1	721	14.6
医師、看護婦、研究者などの専門家	142	6.3	240	9.0	382	7.7
母親	116	5.1	229	8.6	345	7.0
彼氏や彼女	106	4.7	147	5.5	253	5.1
専門書	76	3.4	82	3.1	158	3.2
父親	76	3.4	59	2.2	135	2.7
姉	26	1.2	73	2.7	99	2.0
親類の人	42	1.9	46	1.7	88	1.8
兄	29	1.3	18	0.7	47	1.0
その他	23	1.0	45	1.7	68	1.4
特にない	74	3.3	28	1.0	102	2.1
無回答	24	1.1	24	0.9	48	1.0

表30.エイズ、性病予防についての情報をどこで(誰から)得たいか(複数回答)

	男性		女性		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
	(n=2260)		(n=2675)		(n=4935)	
医師、看護婦、研究者など専門家	519	23.0	1029	38.5	1548	31.4
テレビの特集番組	645	28.5	845	31.6	1490	30.2
中学や高校の保健体育の教師	683	30.2	796	29.8	1479	30.0
テレビのニュース	742	32.8	674	25.2	1416	28.7
雑誌、週刊誌	436	19.3	605	22.6	1041	21.1
テレビのドラマ	374	16.5	556	20.8	930	18.8
新聞	353	15.6	278	10.4	631	12.8
中学や高校の養護教諭	183	8.1	391	14.6	574	11.6
中学や高校の家庭科の教師	275	12.2	282	10.5	557	11.3
女の友達	136	6.0	390	14.6	526	10.7
男の友達	328	14.5	71	2.7	399	8.1
漫画、コミック	163	7.2	218	8.1	381	7.7
専門書	149	6.6	196	7.3	345	7.0
ビデオ	153	6.8	115	4.3	268	5.4
彼氏や彼女	115	5.1	137	5.1	252	5.1
母親	51	2.3	149	5.6	200	4.1
電車のつりかわ広告	83	3.7	49	1.8	132	2.7
イベント	60	2.7	55	2.1	115	2.3
父親	47	2.1	37	1.4	84	1.7
親類の人	36	1.6	23	0.9	59	1.2
姉	18	0.8	30	1.1	48	1.0
兄	17	0.8	13	0.5	30	0.6
その他	34	1.5	25	0.9	59	1.2
どこからも得たいと思わない	406	18.0	194	7.3	600	12.2
無回答	81	3.6	134	5.0	215	4.4